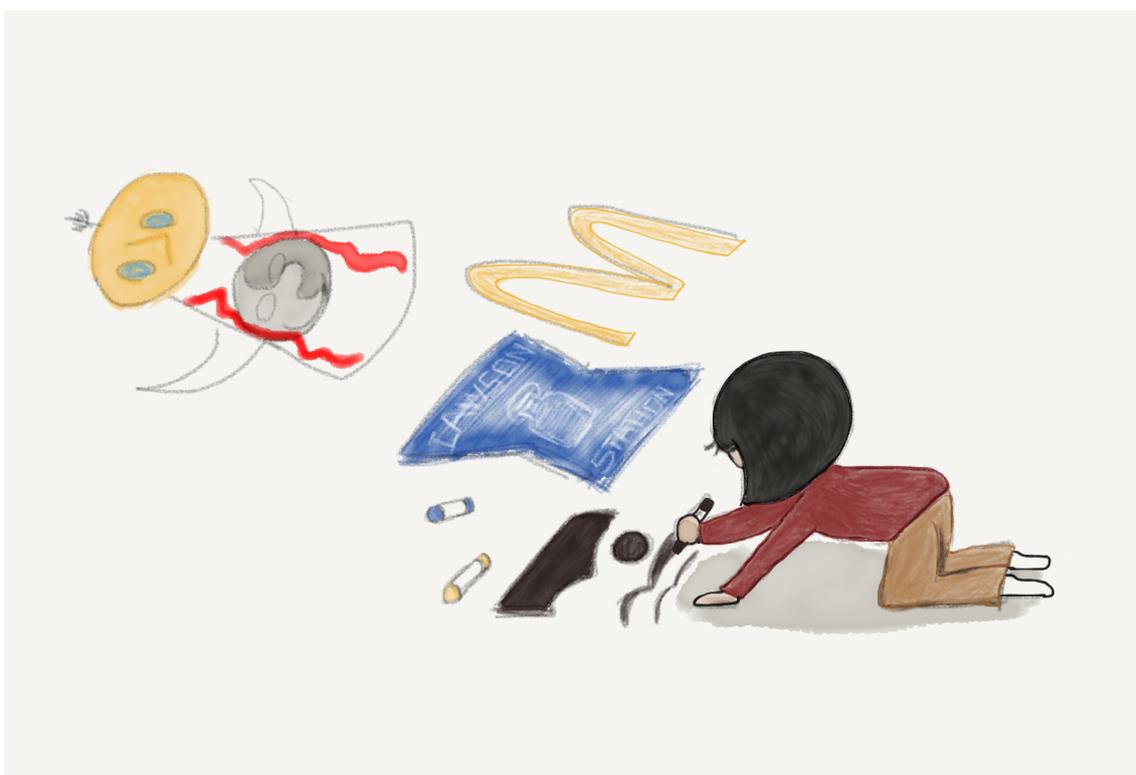


1. 二階建て長屋暮らし

住まいは心身の形成を左右する。3頭の愛犬がそれを教えてくれた。脚先の毛や爪がすぐに伸びるようになったのは、飼い主である私たち夫婦が職場から遠い郊外に住居を購入し、散歩の時間が大幅に減ってしまったからだ。一方、ずっと薄毛だったのに犬種本来の特徴通りに体毛が伸び、性格も明るくなった。これは新居の床が天然木で、壁が漆喰であるなど健材が自然素材であることや、採光がさんさんと降り注ぎ室内が明るくなったからだろう。食事や水は今まで通りだから明らかに住環境が愛犬たちを変えた。



これまで引っ越すこと10回。マンション、アパート、戸建てと様々な住宅で暮らしたが、私という人間を形づくったのは幼少期から思春期にかけて家族4人で暮らした「文化住宅」だ。いわゆる木賃アパートを二階建てにし、炊事場やキッチンを各戸に備えた借家である。「文化住宅」というのは大阪ならではの呼称らしく、私の生まれた翌1970年、万博開催に湧き、千里丘陵に開発されていたニュータウンでの暮らしが最先端ともてはやされたころには、その周囲にまだたくさん残っていた。ちなみに木賃アパートは第二次世界大戦後、住宅の供給率を上げるために、狭い土地に詰め込んだ住戸を廊下でつないだ共同住宅だが、炊事場やキッチンなどの設備が共用であるため、大阪では「文化住宅」とはならず「アパート」となるらしい。

私が暮らした文化住宅は二階建てで各階に4戸。玄関を入ると広い土間、さらに奥に向かって四畳半と六畳間、トイレと洗面所を配した土間とベランダというウナギの寝床のような間取り。玄関土間と隣り合わせに四畳半ほどの台所があり、トイレは汲み取り式で浴室はなく、近所の銭湯を利用していた。畳は京間あるいは本間（191cm×95.5cm）で、近年に暮らしたどの住宅と比べてみても、この文化住宅の間取りのほうが広がった。隣家とは壁一枚を隔てるのみで声は筒抜けだったが、最近の住まいにはない家族や近隣住人との濃密な触れ合いがあった。

この文化住宅で起きた様々なドラマを、ファストフードやコンビニエンスストアの登場、家電製品の進化やレジャーシーンの移り変わりなど、ライフスタイルが劇的に変化した時代背景とともに振り返る。

（平成 28 年 1 月）